

## 聖寿寺館跡発掘調査からみえる

### 三戸南部氏の成立と最盛期の様相

南部町教育委員会 布施 和洋

近年、室町・戦国期の三戸南部氏の居館 聖寿寺館跡において中心区画が確認された。中心区画では、一六世紀前半代と考えられる南北十八間×東西二十一間の規模を有する当該期では東北最大規模の掘立柱建物跡が確認され、建物周辺からは東北唯一の金箔土器や高級陶磁器が出土しており、三戸南部氏に対する評価を修正しなければならない状況となっている。

聖寿寺館跡からは過去二十五年間の発掘調査によって、約四千点の中世陶磁器が出土しており、陶磁器の年代から城館築城年代が古瀬戸後Ⅲ期以降の一五世紀前半代であると推測される。この時期は十三代守行の後半生か十四代義政の頃と考えられ、少なくとも十三代守行の前半生段階では聖寿寺館はまだ存在しておらず、聖寿寺館が三戸南部氏最初の居館ではないということになる。その後、最盛期と考えられる大窯第一段階から大窯第二段階初頭（一四八〇年～一五三九年）に陶磁器量が激増し、他の南部氏関連城館と比較しても突出するようになる。この時期は三戸南部氏の津軽制圧時期と重なることから、日本海側から津軽を経由し、南部地方へと至る交易ルートを手に入れた可能性も伺われる。

聖寿寺館は天文八年（一五三九）に焼失したと伝わるが、一六世紀中葉～末に相当する陶磁器が二十六点しか出土していないことから、一六世紀中頃には居館としての機能を終えていたと考えられ、聖寿寺館焼失後、三戸南部氏は一族では唯一となる山城へと拠点を移し、領国経営を強化していく。